
綾乃のお騒がせ体験搭乗記

鷹嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

綾乃のお騒がせ体験搭乗記

【Nコード】

N7978Z

【作者名】

鷹嶺綺羅

【あらすじ】

美奈子シリーズとヴァルキリーズ・ストームをつなぐ作品です。ヴァルキリーズ・ストームでちょっとだけ出てきた天皇専用騎「水龍」の後継騎。実はこの騎体は動かせません。そこには、とんだ裏話があつて……。

第一話

某月某日

皇居

皇室近衛騎士団メサイア第三レベル格納庫

「うつわーっ」

綾乃がそれを見た第一声が、これだった。

その足下に立ち、てっぺんを見ようとすれば、後ろにひっくり返りそうになる。

全高は、確か32メートルだったかな？

綾乃は、事前に受けた説明を思い出した。

「MDIJ - 604。『水龍』です」

横にいたこの施設の関係者が綾乃に説明する。

綾乃は、撮影スタッフと共に、その人物が広報課の山本という名だと挨拶されていた。

「近衛でも特殊騎扱いです。海外のそれと比べても、かなり高性能騎なんですよ？」

「あれ？これだけ白いんですか？」

綾乃がいるのは、近衛騎士団メサイア格納庫の中だ。

巨大な格納庫の中には、メサイアが居並んでいる。

日本で普通に生きていれば、絶対見ることが出来ない光景が目の前に広がっていた。

生徒会長の四方堂先輩なら失神モノだろうなあ。と、綾乃は意地の悪いことを考えたものだ。

さっき途中で見たメサイアとは少し離れた別の施設に格納されている、その騎を見た綾乃が疑問に思ったのは、そのメサイアの色。さっき並んでいたメサイアの色は、確か濃紺に近い色だったか…

…。

「ああ。あれですか？あれは通常騎でして。部隊や状況によって色を変えることもありますよ？」

「こっちは、違うんですね？あれ？」

よく見ると、同じような白いメサイアが何騎も並んでいるのが綾乃の興味を引いた。

ただ、ほとんどが組み立て中らしく、ほとんどが、体の一部が欠けている状態だった。

「白いのがたくさん……この、水龍って子のお友達ですか？」

「え？」

山本は、驚いた顔で綾乃を見た。

「あ、すみません。変なこと言って」

「いえ」山本は慌てて手を振って否定した。

「メサイアコントローラーの子達も同じようなことといいますからね。あ、すみません。ここではご遠慮下さいね？」

カメラマンの小林がカメラを動かす仕草をただけで止めが入る。

「カメラはすぐにお渡ししますけど、それだけはどうか」

スタッフの一切の機材は、後ろにいる近衛兵の監視下にある。

スタッフも契約上、何より、銃を持った近衛兵とのめ事などは願い下げだった。

「了解。でさ、あれが「皇龍」って奴？」

小林の指さした先は、向かい合って立ち並ぶ白いメサイアの奥。そこには、ライトに照らされて鈍い金色に輝くメサイアがいた。

天皇専用騎「皇龍」だ。

「はい」

「で、あの横のシートで囲われたのは？」

そこには、騎体が推測できない程、シートやカバーに覆われたメサイアとおぼしき物体があった。

「あれについてはお答えできません。ご了承下さい」

「あつ、そ」

「ここはそういうところですから」

綾乃達がここにいる理由。

それは綾乃の仕事。

そして、近衛兵団のイメージキャラを向こう10年タダで引き受けたことになっている綾乃の初仕事。

それが、近衛兵団隊員募集のポスター撮影。

何枚か撮影される中で、最もインパクトが期待されているのが、この水龍を使った撮影。

水龍の片手を、その目元まで持ち上げ、その手のひらに綾乃が乗る。

といった、いわば「美少女とメカ」の黄金則に乗っ取ったといえる構図だ。

当然、撮影される綾乃も、ステージ衣装ではない。

今回は、近衛右翼騎士の制服を凛々しく身につけている。

ちなみに、後で同じ構図で、メサイアコントローラーの戦闘服と騎士のプロテクトアーマーでも撮影する予定だ。

どれが採用されるかは、綾乃でもわからない。

ただ、この制服が一番、綾乃は気に入っていた。

「さて。ここでの注意事項はもうたくさんでしょう。機材をお渡しします。準備に入ってください」

各所から、整備兵や騎士達が遠巻きに見つめる中、撮影スタッフが準備に入る。

「各整備兵に通達！ぼつとしているな！いいか！？握手だの記念撮影だの、サインだの絶対禁止だ！バカやらかしたら、海イたたき込むぞ！」

スピーカーから警告じみた通達が響き渡る中、綾乃は無理を承知で、メサイアのコクピットを見せて欲しいと願いだした。

「コントローラールームならいいでしょう。でも、くれぐれも写真撮影だけは」

「わかっています。っていうか、私、カメラ持ってませんし」

「ああ。そうでした」

クスクス笑いあう山本と綾乃は、リフトでメサイアの頭部まで上っていった。

周囲では、近衛兵の監視の元、撮影スタッフがカメラやライトの設置を急いでいる。

経験から、まだ時間的余裕はあるのがわかる。

ガコンツ

不意に音がして、リフトが止まった。

「うっわー。高いですねえ」

「ビル3階位に相当します。騎士はここまで飛び上がって乗り込むことがあるんですよ？」

「本当ですか？」

下をのぞき込むと、足下がすくむ。

慌てて視線を前に戻した先に、H・M i n a s eと書かれたプレートが張られているのを、綾乃が見つけたのは偶然のことだ。

それが、この騎のメサイアコントラーの名前だということを、綾乃は知らない。

「みなせ？」

「どうしましたか？」

「はあ。クラスメイトのお友達に同じ姓の子が」

「ああ。悠理君ですね？」

「ご存じなんですか？」

「この水龍は、そのご両親の騎ですよ」

「えっ!？」

思わず居住まいを正す綾乃の姿に、山本は苦笑しつつ言った。

綾乃が、二人の息子の婚約者であることは、近衛関係者なら公然の秘密、むしろ常識だ。

「気になりますか？」

「はっ、はあ……」

「そんなものですかね。……さて、少し離れていてください」

山本はそういうと、水龍の頭部装甲の一部を開き、出てきたコンソールを操作する。

バシュッ

空気が漏れるような音がして、装甲が大きく開いた。

「ここがメサイアコントローラー、つまり、騎士のメサイアの操縦をサポートする任務につく隊員達が搭乗する所です。略してMC
」

「へえ」

複合装甲をくぐり、中をのぞき込む綾乃。

薄暗い中、あちこちに配置されたパネルやスイッチ類のぼんやりとした灯りが見える。

少なくとも、山本にはそう見えた。

というか、山本は綾乃の横顔に見とれていて、コクピットの状態に何ら関心を払っていなかった。

「意外と、シンプルでしょう？」

そして、山本は、綾乃が奇妙なことをしているのに気づいた。
にこやかに、小さく手を振っているのだ。

「瀬戸さん？」

「え？あ、申し訳ありません」

慌ててハッチから体を出す綾乃。

「いえ。どうしたんですか？」

ハッチを閉めつつ、山本が尋ねた。

「あ、可愛い女の子が手を振ってきたんで、思わず」

バツが悪そうに笑う綾乃だが、山本にとって驚くには十分だった。
「瀬戸さん？」

「す、すみません、変なこと言って」

「山本さん」

無線から驚きと困惑のまざったような声がした。

格納庫内のメサイアを管理するハンガーコントロールからだ。

「どうした？」

「困ります。さっき、水龍のどこいじったんですか？」

「？ハッチを開けたただけだが？」

「水龍のMCLのステータス・パワーが、一時的に入りました。

うそ言わないでください」

「え？い、いや、本当にハッチしか操作していないよ」

「……本当ですか？またヘンにいじろうとしてませんでした？山本さん、いろんな方面から疑われてますよ？今回だって、広報なんて嘘ついて」

「この件ばかりは完璧に潔癖だ。なんなら、ログ調べてくれてもかまわん」

「……えっと、ハッチ開いた際、何か変わったことは？」

「綾乃ちゃんがのぞき込んだくらいのことだが……まさかな」

高レベルのメサイアコントローラーになると、コクピットに入っただけでシステムが起動体制に入ることがある。

ごく希なことだが、しかし……。

「さっきのこともある……か」

山本はつぶやくように言った。

「はい？」

「いえ。こつちのこと」

そして、事態は起こった。

「はい綾乃ちゃんそのまま！」

高さ25メートル近い高さに登ったの撮影だ。
少し視点をずらせば遠く離れた地面がみえる。
誰でも、見えないように命綱をつけてもらったり、万一に備えて
何人も騎士の人が見守ってくれているとわかっていても、どうしても
顔が恐怖で引きつってしまうだろう。

気合いでそれをねじ伏せるあたり、綾乃もまた、プロだった。

フラッシュが焚かれ、何枚もの撮影が進む中、撮影スタッフが知らないところで、綾乃の立っている「水龍」を巡って、各方面が大変なことになっていた。

「あ、あれ？」

最も最初に、その事態に気づいたのは、MCで水龍をコントロールしていた春日少佐だった。

現在の水龍は、ハンガーに固定されており、綾乃の立つ右腕以外全ての間接がロックされている。春日の仕事は、右腕の操作と撮影中の水龍の監視。ただ、それだけだった。

今、次々に間接のロックが解除され、エンジンがアイドリング状態から稼働状態へ出力を上げていく。

ただし、春日は何もしていない。

というか、元に戻そうとして、水龍に拒否されていた。

『コントロールより春日少佐！何をしている！』

「わ、私、何もしていない……“さくら”！一体、どうしたというの！？」

目の前の精霊体に驚きを隠せない声を上げる春日だったが、目の前の精霊は、悲しそうな顔で春日に語りかけた。

（お願い。この女の人を……お母さんを、あの子に会わせてあげて）

「あ、あの子？、だ、誰のこと？」

（お願い）

第一話（後書き）

メサイア……美奈子ちゃんの憂鬱シリーズだけ読まれていては、何のことかわかんない方ばかりでしょうが、どうかヴァルキリーズ・ストームもよろしくお願いします。

メサイアの元のイメージは、FSSのMHとガンダムのMSそのものです。

近衛騎士団〃ミラージュ騎士団のイメージ図式は公式設定でも明らかにしている所ですし……。

ちなみに、メサイアのイメージは……。

「白龍」〃「LED」

「水龍」〃「シュベルター」

「皇龍」〃「KOG」

「幻龍」〃「ルミナス（カルバリーR）」……ただし、騎体カラー違います。近衛の標準騎がこれになります。

って所です。好き勝手書いてごめんなさい。イメージ掴んで欲しいだけなんです。って、永野センセイ、ごめんなさい……。ちょっと続編書いてください。

第二話

当然、綾乃達もその異変に気づいていた。

何かの機械の作動音らしい甲高い金属音が鳴り響き、居合わせた整備兵達が右往左往する。

「スタッフをさがらせろ！総員退避！」

「え？きゃっ！」

足下が揺れ、綾乃は水龍の掌の上にへたり込む。

そして、綾乃を護るように左腕が右腕の上に覆い被さると、

水龍は、ハンガーから降りた。

山本が戻った時、ハンガーコントロールは大騒ぎになっていた。メサイアが暴走していることを、彼ら自身が認めざるを得なくなっているからだ。

「少佐！春日少佐！何をしている！止めろ！」

「ダメ！コントロール不能！強制停止システム作動しません！さくらが！」

通信越しの春日の声が涙声になっている。

「さくら！やめなさい！何をやっているかわかっているの！？」

「え？だから！それと何なの！？わかるように説明なさい！あーんっ！もう始末書書きたくないよおっ！！」

「少佐、さくらは何と言っている？」

「あの子に、お母さんに会わせてあげてって！何のことかわかりませえん！（号泣）」

「あの子？お母さん？」

精霊体にとって、「あの子」とは、仲間のメサイアの精霊体の中でも年下の存在、つまり、自分より後に生産された精霊体を指し、

「お母さん」とは、専属レベルのメサイアコントローラーを指す。それはわかっていても、どの騎体の、誰を指しているのか、山本には思いつかなかった。

「とにかく止める！緊急事態だ！待機中の騎体を出せ！」

「ダメです！動きません！」

通信兵がとんでもない報告をしてきた。

「どういうことだ！？緊急事態に備えて待機中だろうが！整備は何を」

「精霊体がコントロールを拒否しています！」

「はあっ！？」

メサイアの精霊体は、自己の意志を持つ。

しかし、コントロールを拒否するなどというほど、強い意志を持つものではない。

少なくとも、山本達はそう教わってきたし、そんな意志を示されたこともない。

「ど、どういうことだ？精霊がストだと！？」

「水龍、動きます！」

監視モニターは、歩き出した水龍の姿を捉えていた。

「どこに行こうというんだ？そっちは奥だぞ？」

山本は、それでわかった。

「あの子」が誰なのか。

「903号騎のステイタスモニターを出せ！それと、水瀬少佐を呼び出せ、緊急事態だ！」

水龍の目指す先、それは「皇龍」の隣、カバーに覆われていたあのメサイアだ。

「えっ……きゃっ！」

不意に覆われていた左手が動き、つぎの瞬間、左手はメサイアのカバーを力任せにはぎ取った。

掌に見つけたグリップらしい所にしがみつくようにしていた綾乃

の目に、そのメサイアが姿を現せた。

「金色のメサイア……？」

隣の皇龍にそっくりだが、でも、頭の形が違う。

綾乃にはその程度しかわからなかった。というか、そんなことを考えていられる状態に綾乃はなかった。

水龍の右手は、そのメサイアの頭部に吸い寄せられるように伸び、あわせるようにメサイアの頭部ハッチが開いた。

「え？え？」

まるで、綾乃に、
乗れ。

といわんばかりのことだった。

自分の乗っている掌と、ハッチの向こうのコックピット。
何度もそれらを交互に見た挙げ句、

「えいっ！」

綾乃は思いきってハッチの中に移った。

この子の掌にいるより、安全だ。

そんな、打算の結果だった。

綾乃を受け入れた途端、ハッチは閉まった。

「えっ、と……」

真っ暗な中、ぼんやりと照らし出されているのは、コントローラ
ーシートだけ。

（きつと、すぐに助けが来てくれる）

綾乃はその時を待つことにした。

それ以外、自分に何が出来るわけではない。

「おじやましまあす」

なるべく、スイッチなどに触れないように、こっそりとシートに
座る綾乃。

「へえ……」

意外と座り心地がいい。

ふわふわした感じで、下手なソファよりゆったり出来る。

ただ、この心地よさと暗さは、今の綾乃には大敵だった。

「……あ……だめ」

連日の仕事の疲れがたまっている綾乃は、すぐに睡魔に抱かれることになった。

それは、夢か現実か、綾乃にはわからない。

綾乃は青白く光り輝く部屋にいた。

四方の壁全体が、青白く光る世界。

そして、“それ”は綾乃の目の前に現れた。

「？」

それは、髪をツインテールにした年端もいかない少女。

綾乃が一瞬、彫像かと思ったのは、少女が水晶の柱の中に埋め込まれていたから。

下半身と両腕は、水晶の柱の中に埋まっていて見えない。

「？」

彫像にしては、あまりに肌がリアルすぎる。

「……」

つんつ。

突っつくと、柔らかい。生身の女の子だ。

「んっ」

そして、少女の端正な眉がぴくりと動く。
生きている。

「あの？もしもし？」

さらに突くと、少女は弱々しく瞼を開いた。

「あの？」

「……ママ？」

「いつ、いえ、私、そんなトシじゃありません」

由里香が聞いたら激怒モノのセリフだ。だが、少女がグズリだしたのとは関係ないはずだ。

「……グスッ」

「あ、ああつ。なっ、泣かないで？」

「だ、だって」

「と、とにかく、こんなヘンなモノをとりましょう！」

「えっ？」

「女の子をこんな所に閉じこめておくなんて、許せません！」

「ダッ、ダメ！」

水晶を無造作に掴んだ綾乃の手に、瞬間、軽く電気が走った。

「！！」

「だつ。ダメだよ。お姉ちゃん。こ、これは」

「いいえ！」

慌てる少女を前に、綾乃は断言した。

「この程度、なんでもありません！」

ガシッ。

力任せに水晶を握る。

「あれ？」

水晶は、まるで砂のように、綾乃の手の中で粉々に砕け散っていく。

手のしびれは、まるで免疫が出来たように感じない。

「……」

「ほ、ほらっ。大丈夫ですよ。」
少女の驚きの視線をごまかすように、綾乃は次々と水晶を破壊していった。

そのころ、コントロールは上を下にの大騒ぎになっていた。

封印されていた精霊体が突然目を覚まし、メサイアの起動ステータスが作動、セキュリティで何とか完全起動が阻止されているという危険状態が発生したからだ。

主力メサイア二騎が暴走などという最悪のシナリオが、居合わせた全てのスタッフの脳裏をかすめていた。

「ばっ、馬鹿な！誰の仕業だ！？」

「903号騎、精霊体の封印が外れていきます！」

「バカをいえ！あの封印がそう簡単に ええいつ！外部からの破壊工作の可能性は！？」

「可能性全てを割り出せ！侵入経路を割り出すんだ！」

数分後。

「わかりました！解除操作は」

報告の第一声を発したオペレーターの声は、次の瞬間、悲鳴になった。

「903号騎MCR内！封印解除率上昇！現在45...49...

50を突破！すごいスピードです！」

「MCR内部情報を！」

「山本中佐...現在、MCRにいるのは」

山本の横にいた技官が小声で山本に話しかけた。

「冗談はよせ」

「しかし」

メサイア・コントローラー・ルーム

「MCR内部のコントローラーのステータスチェックは出せるか？よし。いいか？モニターを続ける。コントローラーレベルのチェックが最優先だ」

「最悪は……」

メサイア・コントローラー・ルーム

「MCRの自爆装置、作動チェックしておけ。我々にとっては、
アイドル一人の命より機密保持だ」

「はっ……はい」

第三話

夢か現実かわからない世界で、綾乃は少女と出会った。

「あの……お名前は？」

フルフル

泣き出しそうな顔で、少女は首を横に振る。

「まだ、ないの」

「え？」意味がわからなかった。

「まだ、ママがいないから、名前、もらえないの」

「ママが、いない？」

「14号機なんかね？私より後に造られたのに、すぐにママが出来たから、由理香って名前つけてもらえたんだよ？だけど……」

「でも、お父さんが」

「パパの方がもつとヒドイもん！」

女の子はムキになって怒り出した。

「私のこと、“金箔”“金メッキ”ちゃんって呼んだよ？ヤダっていったら、“金箔”ちゃんでもいいか？って！」

「……どこの誰です？娘にそんな名前つけようとするなんて」

「装甲色が金色だからだって！ペットだって、毛色が白ければ「白」、黒ければ「クロ」って名前付けるからって！」

ぐすつ

ぐすつ

泣くな。と言う方が無理かも知れない。

そんな親の下に生まれたら、普通の子ならグレる。

綾乃はそう思った。

「……」

そして一瞬、そんなことをしでかしそうな男の子の顔が脳裏をよぎったのも時へ実だった。

しかし。

「装甲色？」

待って下さい？

綾乃は、その言葉にひっかかった。

装甲？

ここは？

そして、この子は？

メサイア

精霊

「あの……もしかして、私が入った金色のメサイアの……精霊さん？」

「……お姉ちゃん、私が誰だと思っていたの？」

「わかりませんでした」

「……ひどいよお……」

少女はぐするのを止め、怒り出した。

「みんなヒドイ！ パパは私を“金メッキ”っていうし、MCさん達まで私を“金ちゃん”って呼ぶし！ 私、女の子なのに！」

「はぁ……つまり」

綾乃は少女の怒りの訳を訊ねてみた。

「名前がない。それが一番、気に入らない。ということで
すか？」

「そう！」

「……」

うーん。

名前名前。

綺麗な名前がいいな。

綺麗なモノ。

あ、この前、グラビア撮影で使ったあの施設は綺麗だった。

水の都をイメージしたっていう水の時計。

水の中で鈴が高らかに鳴り響く様は、荘厳なまでに幻想的で、本当に綺麗だった。

水と鈴

「……みすず水鈴」

不意に、ポツリと綾乃が呟いた。

「え？」

「水鈴って、ダメですか？」

「みすず？」

少女の驚いた表情は、すぐに悲しそうな顔に変わった。
フルフル。

「……いいよ。でも、ダメ」

「？」

「名前は、ママじゃなきゃ、つけられないの」
チラリと綾乃の顔をみた少女は、恐る恐るという顔で言った。

「お姉ちゃん、私のママになってくれる？」

「え？……ええ。あなたがよろしければ、名付け親になってあげ
ます」

「本当！？」

「え、ええ……迷惑にならなければ」
「やったあ！」

ハンガーコントロール

ここに居合わせたスタッフ達が、903号騎と呼ぶメサイアのステイタスマニターは、ある文字で埋め尽くされていた。

「水鈴？」

「すいれい？」

「みずすず？」

「みずりん？」

「なんて読むんだ？」

「賭けるか？」

「読み方なんてどうでもいい！」

山本の罵声が、スタッフ達を仕事へ復帰させた。

「どういうことだ!？」

「誰かが903号騎に名前つけちゃったんですよ！」

「名付けを!？」

「そうに決まっています。903号騎が喜んでるんですよ」

「903号騎のMCRステイタスはモニター出来てるな？」
メサイア・コントロール・ルーム

「精霊体コンタクト同調率89%を超えています。並じゃないですよ……これ」

「89%？ランクは？」

「AAAで効くと思いますか？」

「水鈴水鈴。ふんふふうん」

“水鈴”と名前が決まった少女は、鼻歌を歌いながら、綾乃の周りを飛び跳ねていた。

「よかったですね」

「うんっ！」

「じゃ、もう、これでみんなにもちゃんとした名前で呼んでもらえるし」

「うんっ！ありがとうね。ママ！」

「……お母さんです」

「？」

「ママじゃなくて、お母さん」

「お母さん？」

「そうです。ママっていう呼び方、実は私は好きじゃないんです。ペロツとばつの悪そうに舌を出す綾乃。

「うんっ！お母さん！」

水鈴は嬉しそうに綾乃に抱きつく。

年の程は6歳位。

まだ娘というには早すぎる気もするが、小さい子に甘えられるのは、母性本能が刺激されるのか、悪い気はしない。

そつと抱きしめながら、綾乃は水鈴の髪を撫でようとして、出来なかった。

「こらっ！」

不意に世界に割り込んできた者がいたからだ。

それは、綾乃も水鈴もよく知った人物。

水瀬だった。

「ダメでしょ！こんなに人様のご迷惑になるようなことして！」

「だってだって！」

水瀬は綾乃から水鈴を引き離すと、その小さなお尻めがけて手を振り下ろした。

ペチンッ

軽い音が辺りに響く。

「痛あい！」

「さくらや周りの子まで巻き込んで！こんな騒ぎ起こして！」

「知らないもんっ！」

「連帯責任！金ちゃんもとる！」
ペチンッ

「うわーんっ！私、ちゃんと名前あるもん！」

「僕が考えてあげたでしょ！？」

「あんなのヤダもん！」

「贅沢いわない！」

ペチンッ

「えーんっ！やだもんやだもんっ！」

パンッ

空間の全ての音が、その破裂音にかき消された。

綾乃が、水瀬をひっぱたいた音だった。

「え？」

思わず、上げた手を頬にあて、動きを止める水瀬。

その視線の先には、顔を真っ赤にして怒っている綾乃がいた。

「……」

「あ、あの、綾乃ちゃん？」

ぐいつ。

水瀬の耳を力一杯引つ張る綾乃。

そして、

「悠理君っ！……！」

マイクなしで広いコンサート会場の端にまで届く音量の綾乃が、
渾身の力を込めて、水瀬の耳元で怒鳴りつけた。

水瀬の意識が、一瞬、遠のいた。

「小さい女の子に何をするんです！」

「あ、あの、だつ、だからね？」

「だから明後日もありませんっ！いいですか！？ その前に二人とも、そこに座りなさい！」

「わつ、私もお！？」

何故か、水鈴まで正座させられた後、綾乃の説教は延々、整備部隊が水鈴のMC Rハッチの解体に成功、内部に關係者が入り込むまで続けられたという。

なお、解体にかかった時間は、整備記録によるとのべ6時間。かかった費用は、全額、公では由忠の給料から天引きされたという。

3日後 。

「やつ、やつと終わった……」

今回の件に関する始末書書きが終わった水瀬が、ペンを握った形で固まった右腕からペンを引き抜き、机に突っ伏した。

「全く、相変わらず大変ねえ」

始末書を引き取りに来た事務官が、始末書の内容をチェックしながら気の毒そうに声をかけてくる。

「でも、いつかはきつと、いいこともあるわよ」

「ひ、人の情けが身にします」

「うん。ところで悠理君？」

「何です？」

「この精霊体の名前、「すいれい」ってなっているけど、いいの？」

「……もう、知りません。それで通してください。整備の三枝さんもいつてましたし」

「ふうん？」

その翌日

「どういうことです!？」

美奈子が教室に入った途端、罵声が響いた。
見ると、綾乃が水瀬の首を締め上げていた。

「あ、綾乃ちゃん……苦しい」

「何ですか!？この“すいれい”って!？」

「な、何が違うの?」

「水鈴です!水の鈴でみすず!」

「……へ?」

「ちゃんと言っただじゃないですか!」

「お、覚えてない……」

その態度に激高した綾乃が水瀬を怒鳴りつけた。

「それでも父親ですか!？母親として恥ずかしいです!」

「……」 (生徒某A)

「……」 (生徒某B)

「……」 (生徒残り全員)

以上、これを聞いた時、居合わせた生徒達が発した声でした。

この後、学校では二人が校長室に呼び出される騒ぎに発展したとか。

「おい!綾乃ちゃん呼んでこい!すいれいがゴネて調整出来ねえよ!」

「みすずだもんっ!」

整備仕事の度に綾乃が呼び出されるようになったとか。

「で、何だか知りませんが、私、こんなものにサインさせられたんです」

綾乃が付箋とシールだらけの書類を水瀬の前に出す。

「？」

そつとシールをはがしてみると、それがメサイアコントローラーとして近衛に入るといふ、綾乃の入団契約書で、しかも、契約金の項は¥0だったとか。

事態が沈静化するのに、約2ヶ月近い騒ぎになったという。

いずれにせよ、この年、903号機こと、皇室近衛騎士団総隊筆頭専用騎「水鈴」は、ようやくロールアウト。

その専属MCに、極秘ではあるが、綾乃が指名されたのは、揺るぎのない事実である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7978z/>

綾乃のお騒がせ体験搭乗記

2011年12月25日17時42分発行